
漂流自衛隊

新城高生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流自衛隊

【Nコード】

N0111H

【作者名】

新城高生

【あらすじ】

近未来の自衛隊が空母を造り、新たなる謎の勢力と対峙するが、突如としてタイムスリップしてしまう。果たして、自衛隊員の運命は、謎の勢力とは一体何なのだろうか。

part・0 プロローグ(前書き)

まだ何も起きません。悪しからず。

part・0 プロローグ

時は2050年。日本、いや自衛隊は、念願だった空母を建造した。

初め、世論や世界各国は、専守防衛を掲げる日本に、何故空母が必要なんだと猛反対。しかし、5年前に突如として謎の新勢力が出現し、世界のありとあらゆる基地を攻撃した。

この事を受け、反対の声は鎮まり、建造に至った。

part - 1 出港(前書き)

やっと始まります。

part - 1 出港

体が重い。何でだ？ああ、そう言えば昨日、前祝いだって皆でドンチャン騒ぎした…何の？何の前祝いだよ？船の…出港…

枕元の時計を見ると、時刻は7時半を指す。

「やっべえ、遅刻だ!!!」

俺は慌て服を着替え、部屋を飛び出し、隊舎を飛び出し、船へ走る。タラップがない…ヤバい、隊長に殺されると。恐怖にうち震えていると、後ろで物音がした。

「ひい!!!」

大の男が、変な声を上げてしまった。すると、後ろで笑いが起きた。ゆっくり後ろを向くと、昨日一緒に飲んだ3人が抱腹絶倒、大爆笑していた。

「貴様らか…」

「いやあ、本当に引つ掛かるとは…」

「時計を1時間進めただけなのに…」

「にしても、藤野の焦り様…アハハハツ！」

こいつら、人がどれだけ焦ったか…怒りに震えていると、突然怒鳴られた。

「やっぱりお前等か!!!朝からばか騒ぎして!!!」

「沢野一等海尉!!!」

俺達は慌てて姿勢を直し、敬礼する。

「もう遅えよ、この、バカ!バカ!バカ!バカ!」

一人ずつ頭を殴られた。

「全く、お前等が部下だなんて、先行き不安だよ…はあ。」

金森一等海士!新海三等海曹!田辺海士長!藤野一等海士!直ちに支度にかかれ!」

「はっ!!!」

午前9時、出港のセレモニーが始まった。壇上に渡瀬総理が上がるのを、俺は甲板から眺めた。

「我々日本を含め、世界は新勢力による攻撃を受け危機的状況です。その流れに楔を打ち込むのが、この3隻の航空機搭載型護衛艦です。」

歓声と共に、皆が一斉にこちらを見る。ちよつと芸能人の気分が味わえた。

「では、詳しい船についての説明を田端防衛大臣。」

「はい。では、この3隻の船は、向かって左から、”DDA191やまと””DDA192むさし””DDA193あかぎ”です。これらは、航空機搭載型護衛艦「やまと」型で、甲板の全長はおよそ350m、全幅80mと世界最大です。また、このように3隻を縦にドッキングさせることにより……」

大臣が空を見上げる。俺もその方向を見上げる。どうやら来たようだ。

でかいエンジン音を響かせ、彼方より鉄の鷹が飛来する。F-15だ。ゆっくりと高度を下げ、着陸体勢に入る。甲高い音をたて、無事着陸。

「今のように、大型の戦闘機でも着陸できます。また、船のドッキングに順番は関係ないので、臨機応変に対応できます。」

次に武装ですが、この船は対艦、対潜、対空ミサイルを発射できるMk41VLSが、甲板前後合わせ90セルあり、CIWS6基、3連装短魚雷発射管2基を備えています。さらには、イージスシステムを備え、SM-3を搭載すれば、弾道ミサイル迎撃もできます。最後に、一番問題となりました船の動力ですが、ご存知の通り原子力を使っています。ですが、安心してください。万が一破損、暴走した場合、周囲の防護壁と一緒に、海中投棄できる設計になっています。また、この防護壁は、深度1万mの水圧にまで耐えられるよう設計されています。

以上がこの船の概要です。」

「ありがとうございます。では、これより出港です。」

音楽隊がファンファーレを吹く。まったく、気…

「気楽なもんよね。私達はこれから死地に赴くのに。」

聞き覚えのある声に振り向くと、1人の女性が立っていた。

「お前！！」

「航空自衛隊、中部航空方面隊第303飛行隊、イーグルファイタ

ー近藤安希空士長。よろしく頼むよ、元カレ君。」

「バカ、こんなところでそんなこと言うとは…」辺りを見回すと、何人かがこつちを見て、ニタニタ笑っていた。これはしばらく噂になるな。そんな事を考えていると、船がゆっくり動き始め、横須賀港を離岸した。

part - 2 艦載（前書き）

まだ、説明です。

part - 2 艦載

出港からおよそ一時間。浦賀水道を抜け、房総半島沖で一時停泊船をドッキングさせ、艦載機を待つ。俺の乗る”やまと”は最前部を勤める。

「あなたも野次馬？」

「ああ、安希か。まあな、暇だし。」

「暇ってあんた…」

「安希もか？」

「うん、皆がどんなランディングするか気になってね。」

「へえ、でも何で安希がモデルパイロットだったんだ？」

「うーん、多分広報の関係上女の子の方が都合良いんじゃない。それより、来たわよ。」

見上げると、空を覆わんばかりの航空機が向かって来た。圧巻とはまさにこのこと。先頭はF - 15。

「にしても、まだF - 15使ってたんだな。」

「F - 22の導入が遅れてね。防衛技術が必死になって改造したの。今のはF - 15改改改改改ぐらいよ。元のパーツなんか何も残ってない…」

「へえ〜。」

安希の表情は、どこか寂しそうだった。そう言えば、安希の親父さん、イーグルファイターだったなあ。

そんな事をぼんやり考えていると、目の前に駐機したF - 15から、男が1人降りてきた。

「隊長、ナイスランディングでした。」

「冷やかすな。お前にはまだ負けん。」

まだ？あの口振りからすると、安希はそれなりにできるのか。

「次よ。」

「F - 22か。それとも心神か？」

「F-22で良いんじゃない？私達はそう呼んでるわ。本当はF-15の代わりもだったけど、F-4EJの代わりにならなかつた。っていうか、これも既に型遅れね。」

確かに、こいつに関しては大変だったのを覚えている。アメリカには半ば裏切られたようなもんで、防衛省も必死だった。

「まだ来るわよ。」

「F-2あんなのも動いてんのか。」

「だから、代わりがないのよ。本当に何も知らないのね。」

「分野が違いやこんなもんだ。」

「民間人以下ね。じゃあ当然あれも知らないんだ。」

ほらあれ、と言って指差した先を見ると、見たこともない機体が降りてきた。

「何あれ？」

「F-25”蒼龍”。航空自衛隊員以外には初お披露目ね。でも噂になつてたはずなんだけど…」

「悪かったね疎くて。それで、あの独特のフォルムは何なんだよ。」

「もう、すぐ怒る。あれは、F-23とF-2のハーフなの。」

「ハーフって…」

「分かりやすく言っただけ。あんた達が空母に躍起になつてる頃。私達はあれを作つてた。アメリカさんと共同開発でね。」

ステルスでマルチロール。まさに航空自衛隊が欲していたものよ。」

さてどうしたものか、大分飽きてきた。人の蘊蓄うんちく聞くのは趣味じゃない。だけど、安希のキラキラした目。もう少し…付き合うか。

それに、部隊把握は大事な仕事だ。後で資料とにらめっこするなら、この美人な先生に聞いところ。

ねえねえと言って袖を引っ張る。

「あれがE-2D、早期警戒機E-2Cの発展機よ。それで、その後から来るのが、CH-47KAとUH-60KA。それぞれCH

-47とUH-60の発展機よ。それから、その後は…」

ここからは俺の領分。

「あれは、哨戒機XP-1の小型機、XP-2。ほとんどこの船に
合わせて作ったようなもんだ。それから、その後は哨戒ヘリSH
-60の後継機、SH-60Lだ。そこで、その後ろがMCH-2
02。掃海・輸送ヘリMCH-101の後継機だ。これで終わりか
な。」

「F-15とF-2がそれぞれ20機、F-22が30機、F-
25が10機、E-2Dが5機、CH-47KAとUH-60KA
がそれぞれ10機。それと。」

「XP-2が5機、SH-60LとMCH-202がそれぞれ20
機。孤立しても戦えるな。」

「嫌なこと言わないで。」

『藤野一等海士、直ちにCICに來い。』

「あんたって、いくつになったら呼び出されなくなるの?」

「さあな。」

俺は走ってCICに向かった。

part - 3 漂流（前書き）

2000HIT突破。駄文お付き合いありがとうございます。ついに！！

part - 3 漂流

CICに駆け付け扉を開けると、分かりやすく空気がピリツとしていた。

「藤野一等海士、遅れました！すみません！」

「馬鹿者！！」

怒鳴った声の主は、隊長ではない。ゆっくり顔を上げる。

「芹澤一等海佐！！」

「まったく、こんなのにCICを任せて大丈夫なのか？」

「私は絶対の信頼をおいています。芹澤艦長。」

「フン。」

まずいな、艦長が視察するのを、すっかり忘れていた。印象悪いなこりゃ。

「で、誰が何なんだ？」

「はい、この藤野一等海士と金森一等海士が情報処理、田辺海士長と新海三等海曹が火器管制のエキスパートです。」

「では君は？」

「強いて言うなら戦術予報ですね。」

「戦術予報ねえ……」

「それより隊長、何でここCICなんすか？空母ならCDCじゃ……」

「この艦種忘れたか？DDA”航空機搭載型護衛艦。あくまでも日本は空母と認めてない。」

「はあく呆れた。」

「さて、私はブリッジに戻る。ま、君たちが活躍しない事を祈るよ。」

「ええ是非。」

だがその願いは、直ぐに打ち砕かれた。

「右舷前方、不審な艦船を複数発見！！」

モニターに向かう桐島二等海曹が叫ぶ。

「総員戦闘配置につかせる。艦載機は発進準備。」

「了解。」

『右舷前方不審な艦船を複数発見。総員戦闘配置につけ。艦載機は発進準備。』

「藤野、金森不審船の識別急げ！」

「はっ！」

俺は光学カメラ、金森は三次元レーダーを操作した。

「三次元レーダーによる敵艦識別完了。駆逐艦2、巡洋艦2、空母1。サイズ、形状共に既存艦船と不一致。」

「光学カメラ敵艦を捕捉。例の青地の星条旗を確認。新勢力と認定。モニターに出します。」

中央モニターにでかでかと映像が映る。

「敵艦飛翔体発射、数3。飛翔体は対艦ミサイルです。田辺海士長！！」

「了解。CIWSオート迎撃安全装置解除。」

右舷前方のCIWSが、対艦ミサイルを次々撃ち落とすのが、モニターに映る。

「君達、私の指示もなく……」

「死にたくないなら黙って下さい艦長。隊長、戦術予報を。」

「藤野、敵艦及び敵航空機の位置情報。」

「巡洋艦を先頭に、駆逐艦、空母の順に配置。航空機10機本艦に向け飛行中。」

「了解。本艦からは、F-22F-2を出撃。敵空母を狙わせる。」

本艦は敵を分断、むさし、あかぎに挟撃させる。」

「了解。各艦に伝えます。」

「第二射きます……！」

「構わん、発進させる。」

「しかし君……」

「艦長に信頼されないとは、可哀想な船ですね。」

モニターに、飛び立つF-22の横で、CIWSがミサイルを全弾

撃破するのが映った。

「くっ……」

「万物は信頼と協力で成り立っていると、私は信じています。」

「……」

さすが隊長、偏屈者で有名な芹澤艦長を黙らせた。だが、今はそれどころじゃない。

「むさし、あかぎスタンバイ完了。」

「了解。敵艦隊中央、空母に向けて攻撃を集中させる。一気に分断、撃破する。」

「了解。ハーブーン装填管、全門解放、発……」

新海三等海曹が言い終わらぬうちに、CICにアラームがなり響いた。

「前方敵艦隊中央に高エネルギー反応……」

「これ、核なんてレベルじゃない……」

「衝撃波きます……」

「衝撃備え……」

全員が伏せると同時に、辺り一面目映い光に包まれた。

part - 4 遭遇(前書き)

高校生活との両立のため、投稿が不定期かつ、遅かったりしますが、よろしく願います。

part - 4 遭遇

「…うっ…くっ…」

どうやら、さっきの衝撃で気を失ってしまったらしい。そういえば…皆は…ゆっくり体を起こすと、皆うずくまったままだった。一人ずつ体を揺すって起こした。

「隊長！！艦長！！金森！！田辺海士長！！新海三曹！！桐島二曹！！鹿島一曹！！鈴木三尉！！乾二尉！！原田二尉！！」

「…ん…藤野か…敵艦は！！」

俺はハツとして、三次元レーダーと光学カメラを操作する。

「どうだ？」

「いません…」「何！？そんなバカな！！」

「しかし、対空、対水上、対潜、三次元、光学カメラ、どれにも映りません。」

「そんな…信じられん…」

各レーダー、カメラの映像をモニターに映すが、どんなによく見ても、むさし、あかぎそれと離陸したF-22とF-2しか映らない。「とりあえず、機体を戻せ。」

「了解。」

「しかし、奴らはどこに消失したんだ？」

皆が考え込む中、金森があることに気付いた。

「隊長、GPS反応してません。」

「何だと！！」

駆け寄って、GPSの画面を見ると、確かに真っ暗なままだった。

「全員で艦内の異常箇所を探せ、他の船、航空機にも伝える。」

「了解。」

俺は全員で、各部署の管制制御コンピュータと管理責任者を呼んだ。だが、返ってくる答えはどこも異常なし。GPSだけが”やられたのか、それともGPS”が”やられたのか。そんなことを考えて

いると、甲板の整備士から無線が入った。

『こちら甲板。航空自衛隊航空機整備士の陣川です。』

「どうした？」

『航空機のことではないんですが…』

「言ってみる。」

『はっ。実は、どうも空の様子がおかしくて…』

隊長は、俺に光学カメラの映像をモニターに出すよう言った。俺はカメラを上の方に向け、モニターに出した。

「モニター出ました。」

「…空が曇ったな。」

『ええそうなんです。先程まで晴天快晴だったのに。それに、周りの様子も…』隊長が目配せする。俺はカメラを水平に戻す。

「これは…霧だな…」

『そうなんです。しかも、我々を取り囲むように、霧が出てるんです。』

「確かに…異常はこれだけか？」

『はっ。』

「ありがとう、助かった。」

隊長は無線を切ると、こちらに向き直った。

「事を整理すると、敵艦隊と交戦中、目映い閃光に包まれ、敵艦隊を見失い、最悪遭難した可能性がある。ということだな。」

「しかし、遭難までどうかと…」

「現在位置が掴めない時点で遭難と見なさなければならぬ。食料はどのくらいもつ？」

「およそ3週間です。」

「3週間あれば、例えばどこにしようとも、どこかの港に入れるだろ。とりあえずこの霧だ。しばしじつと…」

「左舷後方より識別不明艦接近！！」

「敵か？」

「艦首霧を抜けます。」

光学カメラを艦首に向ける。そして、光学カメラが捉えた映像を見て、一同愕然とした。

「あれは…菊の紋章…」

「そんなバカな…」

「三次元レーダー識別完了。これは！！」

「どうした？」

「…照合の結果…識別不明艦…大日本帝国海軍、戦艦”大和”と判明…」

さらに追い討ちをかけるように、大和が光通信を行ってきた。

「大和から光通信です。…」キカン コクセキ オクレ サモナク

バ ワレ コウゲキス”…」

「藤野、今から言うことを送り返せ。」

「了解。」

俺は直ぐに光通信の準備をした。

「我々は、日本国所属艦隊、これより使いを送る。」

その瞬間、全員隊長の方を見た。

「何を言ってるんだ！！まだ最後は送るな！！」

「藤野全部送れ。それからUH-60KAを待機させる。俺が行く。」

「

「さつきから黙っていれば…」

「もし、あれが本物であれば、我々がタイムスリップしたか、大和がタイムスリップして来たことになります。それを確かめます。」

それと、我々がタイムスリップしたのだとしたら、おそらくあの閃光の時です。だとしたら、あの閃光の中心にいた敵艦隊も、タイムスリップした可能性があります。その警戒情報を伝えるに。」

「勝手な事を…」

「藤野と新海も来い。記録と護衛だ。他にも銃の扱いが上手いやつと、この頃の歴史に詳しいやつを集める。」

「はっ。」

part - 5 大和（前書き）

遅くなりました。すいません。

”やまと”の甲板で、UH-60L2機が羽を休め、1機が今まさに飛び立とうとしていた。

中には、”やまと”から俺と、沢野一等海尉、金森一等海士、銃器担当金城二等海曹。”むさし”から、近代史が得意な渡田二等海尉、銃器担当新山二等海尉と飯田一等海曹。”あかぎ”から、帝国海軍マニ…もとい、帝国海軍に詳しい富田二等海曹、銃器担当目黒海士長と横倉二等海曹の十人が乗っていた。

へりは、僅かに浮かび上がると、ゆっくりと船を離れ、海面すれすれを飛び大和に向かった。

無論、これは隊長の案だ。敵の攻撃の死角となる、船と水面のギリギリを飛び敵を観察。比較的武装の少ない後部甲板に着艦。反対する者はいなかった。

大和に近づくと、今これが現実なんだと思い知らされた。

山のようにそびえ立つ艦橋。

近代艦船の主砲である127mm砲が、これでもかと並ぶ。

太い煙突が絶えず煙を吐く。

全て現実…

人の不安をよそに、へりは後部甲板に着いた。どこからともなく人がわいてきて、へりを囲んだ。その手には、古めかしい銃が握られている。

「我々が連絡した使者です。」

「海軍本部に連絡したが、貴艦らの情報は無い。」

「やはり…確かに本部とやり取りしたんですね？」

「ああ…それがどうかしたか？」

「これではつきりした。タイムスリップしたのは我々だ。」

俺を含め、隊員全員がその驚きを、混乱を隠しきれなかった。それと同時に、”あかぎ”から、司令部と連絡がとれないという無線が

入った。もう、間違いはない。隊長は僅かにうなずくと続けた。

「我々はどうやら未来から来てしまったようです。」

「何をバカな……」

「我々は、海上自衛隊航空機搭載型独立護衛艦隊。今からおよそ一世紀未来の日本人です。」

「そんなこと、信じられる訳がない。」

「私は信じるぞ。」

皆一斉に、声がした方を向いた。ざわめきと共に、群衆に一本の道ができ、2人の男性が歩いてきた。

「山本長官！高柳艦長！危険です、下がって下さい。」

「同じ日本人に危険性は感じられんがね。」

そういつて、彼は隊長の前まで歩み寄った。

「司令長官山本五十六海軍大将です。」

「大和艦長高柳儀八大佐です。」

「日本国海上自衛隊沢野一等海尉です。」互いに敬礼すると、俺達は艦長室に案内された。

こ洒落た内装は、戦時下の戦艦とは思えない程。その真ん中に置かれた机を挟むように、山本五十六と高柳儀八、沢野隊長と助言役として富田二等海曹が座った。

最初に口を開いたのは山本長官。

「それにしても、未来から人が来るとは、奇っ怪なことがあったものだ。」

「ええ、誰よりも我々が驚いています。」

その言葉にすかさず反応したのは、高柳艦長。「ん？ということとは、自ら来たのではないのか？」

「はい、いわば遭難です。そして、それが何よりの問題です。」

隊長の声色が変わると、2人の表情は僅かに強張った。

「我々は、敵との交戦中にこの時代に来ました。つまり、その敵もこの時代に来ている可能性があります。」

山本長官は、机に両肘を乗せ、身を乗り出した。

「ほう、それで要求は何だ？」

俺は何のことだかわからなかったが、隊長は話が早いと続けた。「我々には帰る術がありません。そして敵は好戦的ですので、護衛が必要だと考えます。何より我々は、その敵に対する切り札の護衛艦隊です。これ以上ない適役かと。」

「要は、同伴させるといふのか？」

「燃料はあるのですが、食糧が…」

「わかった。検討しよう。」

そのあまりにもあっさりとした答えに、誰もが目を丸くした。当然高柳艦長は反対した。

「お言葉ですが長官、上の許可は？」

「結果を見ればよい。結果を見せてもらうぞ。」

「はい、必ず。手始めに、その行方不明の敵艦隊を見つけます。」

隊長は冷静に言ったが、その内はもの凄く焦っているのがわかった。司令部も、GPSのバックアップも無い搜索など、自ら更に遭難するに等しかった。当然これには富田二等海曹が反対した。

「何を考えているんですか！！誠意を見せるにしても、無謀すぎます！！」

「それでも、やらなければいけない。では、船に残った仲間伝えねばならないので、これで失礼します。」

「わかった。武運を祈る。」

互いに敬礼をし、我々は艦長室を出て、再びUH-60Lに乗り、我々の”やまと”に戻った。我々のやまとに戻った。

part - 6 報告(前書き)

期末試験終了!!! やつと再開できます。

へりが”やまと”に着くと、俺らはすぐに降りて艦長室へと向かった。結果、さつきからやまとの艦長室を渡り歩いていることになる。そう思うと妙な違和感に襲われた。

艦長室のドアをノックすると、入れというあからさまに不機嫌な声が出た。隊長を先頭に、自然と年功序列で入って行った。

「艦長、報告します。」

「何だ？」

「まず始めに、タイムスリップしたのは我々だということが確定しました。次に、食糧についてですが、我々が恐らく同時にタイムスリップしたのである。新勢力を発見することを条件に、提供を検討してもらっています。」

その言葉に、艦長がさかさず反論した。

「もし、新勢力がこの時代に来ていなかった場合、食糧補給はどうするんだ？」

「自艦の食糧がもつ、3週間のうちに、揺り戻しがあることを、祈るだけです。」

「詰まるところ、神頼みか……」

艦長は、深くイスに座り直し、背もたれに寄りかかった。その様子を横目に、金城三等海曹が隊長に耳打ちした。内容は聞こえないが、すぐに隊長は金城三等海曹の身を離れた。話半ばだったのか、少々不機嫌そうな顔をしながらも、壁際まで下がった。

隊長は神妙な面持ちで続けた。

「万が一、新勢力がない。あるいは、帝国海軍が食糧提供を渋った場合、生き抜く為に非人道的な処置を行う覚悟をしておいた方がよろしいかと……」

「帝国陸軍の二の舞になれと？」

隊長は黙ってうなずいた。帝国陸軍の二の舞と言って、悪寒がしな

い者、意味がわからない者はいない。それは…
生き抜く為に、無関係な人間を殺し、食糧を奪うことを意味している。

当然、俺を始め自衛官にそこまでの覚悟がある訳がない。無論、人は追い込まれば、突拍子もないことをしでかすのだが…
しばらくの沈黙の後、艦長がゆっくり話始めた。

「…沢野一等海尉、貴官に敵艦隊搜索部隊の指揮官に任命する…機体、及び隊員の選定もこの指揮権に含まれるものとする…勝手に話を進めた蛮行の責任、とってもらうぞ。」

「はっ!!」

隊長は思わず話がスムーズに進み、嬉々としていたが、その肩に重大な責任がのしかかったのは、紛れもない事実だった。

「じゃあ、私はブリッジと他の二隻を含めた隊員にこのことを伝える。」

そう言って艦長は部屋を出た。

俺は自室に戻る前に、甲板に立ち寄った。

甲板への扉を開けると、心地好い風が吹き抜けた。しかし、この風は自分達の時代のものではない。そう思うと、なんとなく寂しくなり、俺は扉を閉めようとした。その時、どこからともなく話し声が聞こえた。しかも女性の。

気になり艦橋づたいに歩いて行くと、海空の女性自衛官が酒盛り……いや、酒は無いはずだから、おそらくコーヒーを片手に雑談していた。

内一人が、俺に気付いた。気付いたのは、たしか”やまと”機関科の水野美紅海士長。

「さて、誰かさんの彼氏が来たみたいだし、私達は解散しますか。」
えっというどよめきと共に、視線が俺に集中し、あゝという声と共に、皆散っていき、あっという間に2人きりになった。

「…明日のこと…聞いたか？」

「フツッ、他に話すことないの？」

「無い。」

俺はきつぱり言った。

「あっそ。まあいいわ…聞いたわよ。それどころか搜索隊に選ばれた。」

「本当か…！」

「何嬉々としてんのよ！！米軍がよってたかっても勝てないのに、自衛隊の旧式機が敵の前に姿現そうとしてるのよ…！」

「…」

何も返せない俺に、安希は続けた。

「せつかくF - 25が配備されたのに、この作戦には一機も参加させず、F - 15のみ。上が欲しいのは情報だけ、私達の生存は二次だわ。」

「そんな…」

「それに、適当なところで被害を抑えようとしてるとこみると、簡単に帰れないって結論が出たみたいね。」

「でも、隊長が揺り戻しがあるって…」

「バカね、それは私達が本震に巻き込まれていた場合よ。もし、本震が別にあつて、私達が巻き込まれたのが揺り戻しだったら？」

「あっ…」

「…あの頃と…なんにも変わってないのね…」

「ごめん…」

「…そういうところが嫌いなよ…」

安希はそう言つて艦橋に入った。

part - 8 搜索(前書き)

大変遅くなりました。

只今完全復活しましたので再開します

part - 8 搜索

私は起床予定時刻より早く起きた。二度寝する訳にもいかず、デッキに出た。ゆつくりと自分の機体に歩み寄り、そつと触れる。もう、帰って来れないかもしれない。ここにも、元の時代にも…

「近藤…」

後ろから声をかけられ振り向くと、隊長がいた。

「俺達は…帰って来るんだ。それだけ言いたかった。」

「はい…」

午前9時、搜索が開始された。搜索隊は、F - 15、E - 2D、XP - 2、SH - 60L、で構成されている。

私と隊長は、E - 2Dの護衛を任された。

「搜索隊各機へ、こちらイーグルアイ。雲が出てきた。交戦の際は注意せよ。」

「イーグル2近藤、了解。ちゃんと見張つといてよ、AWACS。」

「イーグル2、こちらCIC。無駄口叩くな。緊張しろ。終わり。」

「まったく、厳しすぎ。」

私は気を引き締め直し、操縦桿を強く握った。操縦桿は、この機体に残った唯一の初期パーツだ。装甲も計器も変わり、これだけが父を感じさせる。

「搜索隊各機、こちらイーグルアイ！前方識別不明機二機確認、注意せよ！」

「AWACS、こちらイーグル1。奴等か判断出来るか？」

「こちらイーグルアイ。飛行速度から、この時代の機体ではないと思われる。」

「了解。イーグル隊各機へ、こちらイーグル1。今回の任務は、敵本隊の発見だ。ギリギリまで撃墜するな。終わり。」

まもなく私の初陣が始まる。奴等を見た者は誰も帰って来なかった。

私も…

ここで初めて、自分の手が震えているのに気付いた。

「イーグルアイより報告。敵が180°方向を変えた。おそらく本隊への帰還ルートに入ったと思われる。終わり。」

これでまだしばらく、緊張状態から解放されないことが決定した。

いつまでも続く青い海と空。この先に待つのは、希望か…絶望か…私は、敵との接触で何らかの変化が生まれることを願った。

「こちら海上自衛隊哨戒機！！敵艦隊捕捉！！数、巡洋艦級3、駆逐艦級5、空母級1！！終わり。」

「こちらイーグルアイより報告。こつちでも同じものを確認した。

これより監視を…！！敵艦より高速飛翔体3！！おそらくミサイル！！各機回避運動の用意！！」

操縦桿を握る手に、汗が滲む。ミサイルアラートは鳴っていないが、そもそもこの機器が今この状況でどこまで信用できるかわからないとそこへ無線が飛び込む。

「こちらイーグル1。レーダー照射を受けたのはイーグル5、10、12。その他は流れ弾と第2波に十分警戒せよ！！」

「了解。」

やがて飛来したミサイルを3機は難なくかわした。

「こちらCIC。搜索隊各員に告ぐ。直ちに全機撤退せよ！！」

「しかし、ここで追尾を断念すれと…」

「これは命令だ。直ちに撤退せよ。」

「こちら搜索隊。命令を確認、全機撤退する。終わり。」

ここで私達は搜索を断念し、帰路に着いた。

そして”やまと”まで戻り私達は驚いた。甲板に旧海軍の連絡機が着艦していた。

事があつたのは、搜索隊がミサイルを撃たれた頃だった。敵からの攻撃に慌ただしくなるＣＩＣに、大和から使者を送ると連絡があつた。沢野隊長はそれを二つ返事で了承した。そしてきたのはなんと「これはこれは山本五十六海軍大将。わざわざお越し頂かなくともお声をかけて頂いたら伺いましたのに…」

「沢野一尉と言つたな。頼み事をする場合、頼む者が行くのは人として当然のことだ。」

そう言つて山本は案内された会議室の椅子に座つた。着いてきた部下の海兵はその後ろの壁際に立つた。山本が座つたのを確認し、隊長も椅子に腰をかけ、本題に入った。

「はつ。それで海軍大将直々にお出でなさる頼み事とは？」

「先程海軍総司令部より作戦が伝えられた。場所はミッドウエー…」
「会議室には、大和を訪れた10人に加え、各艦の艦長がいたが、その全員の顔が強張つた。その顔を見て山本はゆっくり続けた。

「やはりうまくいかないか…」

「やはり？」

隊長が聞き返す。

「ああ、司令部はまたもや迎撃戦を企ている。それでは駄目だと私は進言しているが、全く受け入れられん。そこで私は独自に攻勢作戦を展開させようとしている。」

自慢話をする子供のように、目を輝かせながら話す山本をみて、全員落胆するしかなかった。

「それで、我々に協力を願ひ出られた？」

「ああそうだ。」

「残念ながら、歴史上その作戦は失敗します。それどころかミッドウエー海戦を期に日本は敗戦までまっしぐらです。」

あまりにもストレートで不吉極まりない発言に、山本の部下が声をあげた。

「貴様、長官に向かい何てことを!!!」

いきり立つ部下を山本は制止する。

「未来から来たと言う者達が言うのだ。本当だろう。その結果は貴官らが参加しても変わらぬか？」

「我々の実力としては、我が方3隻の艦で米艦隊と対等に渡り歩けます。しかしその結果がどんな影響を及ぼすのかははかり知れませんが。」

「私に敗戦という未来を告げた時点で未来は変わるのでは？」山本は意味ありげな笑みを浮かべた。

「かもしれませんが。とにかく、すぐに返事はできません。我々も何百という隊員を抱えているので。」

「作戦は一週間後。早めに頼むぞ。」
そう告げると山本は席を立った。

「ご期待にそえるよう善処します。」
隊長は敬礼し彼らを見送った。

山本五十六が帰った後、そのままのメンバーで会議が行われた。

「どうする？少なくとも私は賛成できない。」
と隊長。

「確かに、全面的戦闘行為への参加は賛成し難いな。」

そう続けたのは”むさし” 艦長の芳山一等海佐。それに”やまと”
”あかぎ” 両艦長が同意する。やはり非参加という方向に傾きかけたとき、富田二曹が勇気を持って手を挙げた。

「あの…でしたら…技術支援は…できないでしょうか？」

「技術支援？」

「はい…あの…当時、あれ程までに被害が拡大した理由は、レーダーと指揮統制及び航空機管制能力の著しい欠如によるものとされています。ですから、我が艦隊のレーダーと隊員の技術で補えないかと…」

皆、内容云々の前に、おどおどしていたはずの富田二曹が急に饒舌になったのに目を丸くした。

「…技術支援か…」

「無理です。」

そう俺は言い切った。

「そもそも、僚艦以外に情報の提供をするのはほぼ不可能ですし、万一できたとしても、現代のレーダーとこの時代の”レーダー”のよくなもの”とでは差が開き過ぎです。まず間違いなく向こうの機器のキャパをオーバーします。」

それにすかさず富田二曹が反論した。

「そうではなく、今開発されているものに我々が技術を足して…」

「それは!！」

紛糾する俺達に隊長が割って入った。

「それは…一週間で出来るのか？」

「…」

根本的な問題を突かれ、黙り込む富田二曹を隊長は許さなかった。

「富田二曹！！」

「…いえ…不可能です…先程藤野一士が”レーダーのようなもの”

と言いましたが、それですら出来たのはこの海戦の後です…それに

…現場が日本近海であったとしても、今からレーダーを開発し装備

しミッドウエーに向かうとなると…一週間ではとても…」

「わかっているなら、軽はずみに口に出すな。今はいつも以上に神

経質になれ。」

「はっ。」

会議室を重苦しい空気が包み込む。そんな中”あかぎ”艦長永池一

等海佐が意外なことを口にした。

「なら、大和についていくのはどうだ？」

「ですから永池一等海佐、その後が問…」

そう言いかけて隊長ははっとした。

「気付いたか？」

「大和は…戦闘に巻き込まれない…戦闘の中心は先陣の南雲機動艦

隊…大和ら主力艦隊と行動を共にすれば、戦闘に参加せずに済む！

！」

しかし、その案に芹沢一等海佐が水をさす。

「その後はどうするんだ？我々が未来からきたのは知られている。

そんなことをすれば裏切者扱いされるのがオチだ。」

しびれをきらし、芳山一等海佐が詰め寄った。

「ではどうしたいんだ芹沢！！」

「敵艦隊と接触する。」

「何をバカなことを！！」

「落ち着いて考えてみる。あの時、高エネルギーが発生された直後

俺らは飛ばされた。そしてその高エネルギー反応の中心には奴等が

いた。となれば、奴等に接近しいつでも帰れるようにするのが筋だ

る。」

「しかし奴等は敵だ。ノコノコ近づいたら蜂の巣にされる。」

「なら沈めない程度に敵の武装を叩けばいい。」

「わかりました。」

隊長は大きな声を出し、会話の流れを切った。

「確かに芹沢一等海佐の仰られたようにするのが筋でしょう。しかし、本当にそれが原因かわからない上、せつかく得た信頼を棒に振るのはナンセンスです。ここはとりあえず永池一等海佐の作戦通りミッドウェー海戦に参加した後、敵艦隊に接触しましょう。」

「バカが！！俺の話が聞かなかったのか！！そんなことをすれば裏切者扱い……」

「歴史が変わり始めた。そう突き通しましょう。」

「そんなんでうまくいくのか？」

「うまくいかせませぬ。なにがなんでも。」

part-11 告白(前書き)

過去です

死亡フラグです

漂流二日目の夜。私は彼を甲板に呼び出した。

「何の用だ近藤？こつ見えてけつこつ忙しいんだよ。」

「もう、名前で呼んでくれないの？」

「名前で呼んでほしいのか？」

「別に…」

思わず素っ気ない態度をとる自分につくづく嫌気がさす。

「さつき、うちの隊長が今後の方針についてアンケートとりに来たわ。」

「それが何だ？」

「私は帝国海軍に追従するのを選んだわ。」

「だからそれが何だ？」

私は意を決して本題に切り込んだ。

「ねえ、もしこの作戦が成功して、元の世界に戻れたら…やり直さない？」

「はあ！？」

当然と言えば当然の反応だ。何を隠そう私がかつて彼をフツた張本人だからだ。あの時もそう、素直になれず素っ気ない態度をとってしまった。

「好きだからこそ許せなかった。でも、今の今まであなたを片時も忘れはしなかった…身勝手かも…しれないけど…」

「…ああ…身勝手だ…」

予想通りの答えに、私は肩を落とした。しかし、その後に彼が続けた言葉は、私の予想を大きく裏切るものだった。

「…俺つて奴は…」

「えっ…」

「何も知らずにお前を傷付けておいて、別れを告げられたとき、怒りさえ覚えてしまった…」

彼は一呼吸おいてさらに続けた。

「お前の親父さんは…国に殺された…」

私は塞がりかけた傷口を抉じ開けられたような気がしたが、どこもなく嬉しくもあつた。

「そういう噂は…すぐ耳に入るのね…」 「ああ…自衛隊はどこでもその話題でもちきりだった…それに噂じゃなく事実だろ？」

「まあね…長引く不況の煽りで予算をケチられた防衛省は、そのしわ寄せを各自衛隊は整備及び改修費に回した…今までに類を見ないほど最悪な政治判断だったわ…そして遂に事故は起きた…訓練飛行中にエンジンの一部が脱落…その後すぐにエンジンは停止し墜落…搭乗していたパイロットは死亡…」

「…知らなかつたんだ…エンジン脱落の衝撃で脱出用装置が壊れたこと…それが一整備員とパイロットの問題じゃなかつたこと…そのパイロットがお前の親父さんだつてこと…何も知らずに…俺は軽々しくパイロットのことを罵つた…」 彼は唇を強く噛み締めた。その目にはうっすらと涙が浮かんでいる。彼もまた、真実に苦しめられていたのだ。彼は、ゆっくりと歩み寄り、私を強く抱きしめた。

「必ず帰ろう…必ず…」

「…うん」

私はしばらく彼の腕の中で温まっていた。

part - 12 奇襲 side CIC

それは突然だった。

「沢野一尉！！9時の方向に複数の艦影！！」

「敵か！？」

「敵です！！敵艦より飛翔体！！数15！！」

「C I W Sの安全装置解除！！自艦だけじゃなく帝国海軍艦隊にも気を配れ、一発も撃ち漏らすな！！」

怒号飛び交うC I Cに艦長が駆け込んできた。

「沢野一尉！！状況は！？」

「敵艦に捕捉されミサイルを撃たれま…」

「敵艦より航空機が発艦！！数10…11なおも発艦！！」

「こちらからも要撃機を中心に大至急発艦！！航空機管制には細心の注意をはらい混乱を防げ！！各員対空戦闘用意！！」

「対空戦闘用意！！」

独特な抑揚のある声が艦内マイクから聞こえ、その刹那アラームが鳴り響き、皆ヘルメットと救命胴衣を素早く身にまとった。

「ミサイルC I W S射程に突入、全自動迎撃開始！」

C I W Sが火を吹くと、次々にレーダーからミサイルの反応が消えていった。

「対空目標S A M射程突入！目標まで70マイル！！」

「了解！S A M発射用意！！」

「S A M発射用意！！」

新海三曹が手早く操作するとS A Mを収めたV L Sの蓋が開いた。

「うてーっ！！」

V L Sから撃ち出された5発のS A Mは、きれいな弧を描き目標へ向かった。言い様のない緊張と静寂が艦内を包む。

「…着弾、今！目標一機撃墜！攻撃達成率20%！！」「ちっ…やはりそう簡単な相手ではないか…第二射用意！！」

「敵艦よりミサイル！第二波です！！」

「むさし、あかぎもミサイル外しました！！」

「帝国海軍艦隊に早急なる移動を要請しろ！！」

混乱する最中艦長に命じられ、俺は帝国海軍艦隊の旗艦である大和に向け光通信を行った。それを見た大和は即座に錨を巻き上げ、移動を開始した。

「SAM発射準備用意よし！！目標まで50マイル！！」

「SAM発射用意！！」

「SAM発射用意！」

「うてーっ！！」

再度VLSよりSAMが弾き出され、目標へと向かう。レーダー上で次第に近づく距離。やがて二つが重なり反応が消えた。

「…着弾、今！全弾命中、目標撃破！」それを聞き皆の顔が思わず緩んだ。だが、それも一瞬だった。

「イーグル2、ラプター7撃墜！！救援要請出てます！！」

それは突然だった。

「敵艦隊より航空機！！戦闘機部隊は直ちに発艦せよ！！」

私達イーグル隊の隊員はいち早く甲板に向かった。前の搜索で、イーグル隊が出撃しそのままとなっていたため、私達が出撃しないと後が詰まってしまう。

「安全確認：よし！！各員機体に飛び乗れ！！」

隊長は一言叫ぶと自分の機体に走った。私もその後を様々な装備を身に纏いながら走る。

自機に乗り込みシートベルトを装着し、エンジンをつける。エンジンは甲高い音を発し、機器は明かりを点した。その一つ一つを丁寧かつ素早くチェックしていく。

「オールライトグリーン。チェックオーケー。イーグル2いつでも行けます！！」

私は思わずマイクに向かって叫んだ。

「イーグル1了解！！各機俺についてこい！！」
隊長機が飛び立ったのを確認し、私達も後を追うように発艦した。イーグル隊が全機発艦すると、待っていたと言わんばかりに、ラプター隊のF-22が飛び立った。

「まもなく交戦ポイント。AAM-4の安全装置を外せ。槍を放つぞ！！」

「イーグル2了解。」

私は長距離対空ミサイルの安全装置を外し、ボタンに指をかけた。

「イーグル1より各機。交戦ポイント突入、槍を放て！！」

「イーグル2了解！！」

私は敵機のロックオンを確認し、ボタンを押した。

「イーグル2 Fox-2！！」

私の機体から放たれたミサイルは、真っ直ぐ敵へと向かい視界から

消えた。それと同時に、ミサイルアラートが鳴り響いた。

「CICよりイーグル2。敵にロックされている。注意せよ。」

「イーグル2了解。」

私は言われなくてもわかっていると、心の中で呟きながら、操縦桿を手前に引いた。機首が上を向き、隊列から離れた。アラートがより一層鳴り響き、ミサイルの接近を告げる。

ここまできて、私はさらに操縦桿を手前に引き、機首を急速に持ち上げ、バク転の如く後ろに回ってみせた。

ミサイルははるか後ろを飛び、アラートも鳴りやんだ。

だがもの凄いGが加わり、対Gスーツが膨らみ強引に頭に血を送ったせいで、頭が少しボーンとする。日々の過酷な訓練のお陰で失神こそしないが、女性の体には辛い。もともと、隊内では女性として見られていない。まあ、自分の願いでもあるのだから仕方ない。

「イーグル1よりイーグル2。大事はないか!？」

「大丈夫です。」

「なら構わず行くぞ!全機AAM-3発射!!」

私は長距離から短距離にミサイルを変更し、ボタンを押す。

「イーグル2 Fox2!!」

ミサイルは勢いよく飛んでいき、敵の反応を一つ消した。

「イーグル2 ワンキル!!」

「よし良いぞ!このまま接近戦に持ち込む!!」

敵機は有視界領域に入ると同時に、上方へ急上昇した。私もそれを追い機首を上げ、敵艦に腹を見せる形になった。その時だった。機体に強い衝撃が走り、機体が真つ逆さまに墜ち始めた。

「こちらCIC!!イーグル2どうした!？」

「わかりません!!突然エンジンの出力が…」

「こちらイーグル5!イーグル2何してんだ!?!早くベイルアウトしろ!!」

私はベイルアウトの装置をいじるが反応がない。

「無理です!装置がイカれて…!!」

目前に迫った海面を見たのを最後に私は意識を手放した。

蛍光灯のまぶしい光で、私は目を覚ました。見知らぬ天井。だが、どこぞの男子中学生と違い、私の周りには意識の回復を待つ人がいた。

「大丈夫か安希？」

私の顔を隊長と藤野君が覗き込む。

「…ここは？」

「やまとの医務室だ。」

「…そうだ！俺医官の高城三佐を…」

立ち上がるうとした藤野君を隊長は制止した。

「いや、俺が行く。君は近藤のそばに居てやってくれ。」

そう言つて隊長は笑うと医務室を出ていった。

部屋には私と藤野君の二人つきりとなった。

「…私…助かったんだね…」

私はほつと胸を撫で下ろした。だがここで、私は重大なことを思い出した。

「そうよ！！戦闘はどうなったの！？」

私は思わず飛び起きかけたが、お腹に鋭い痛みが走り、再びベッドに倒れこんだ。

「痛ッ…」

「おいおとなしくしてろ！お前今腹に穴空いてんだぞ！！」

「穴！？」

私は藤野君にすかさず聞き返した。穴とは一体何のことか、検討もつかなかった。

「まあ待て、とりあえず落ち着け。」

藤野君は私をベッドに寝かせ、毛布をかけてからゆっくり話し始めた。

「まず、戦闘には勝った。開始20分で敵損害航空機数は10機に

及び、敵がしつぽ巻いて逃げた。

こっち側の損害は、お前の機体とラプター隊の機体一機だけだ。ちなみにラプター隊のやつも助かって、今むさしの医務室にで寝ている。

「それで、お前のケガについてだ。」

私は藤野君の方にくつと体を寄せた。

「安希の隊長さんから救援要請があつて、何人かの手を強引に空けて、内火挺で助けにいった。機体は玉砕してたが、奇跡的にシートと一緒に浮かんでたそうだ。」

そして、引き上げてみたら安希の腹にコックピットの強化ガラスが刺さつてて、医務室に連れてきて緊急手術した。

傷は深く、水に浸かつて出血も酷くて一時は絶望的だった。けど、みんなで輸血して、リアルブラックジャックとの呼び声高い、医官の高城三佐が素早く処置してくれて、今こうやって俺と話せる訳だ。」

「そう…みんなの血が…」

私は胸の上に手を置いた。心臓はいつもと同じように拍動している。だがその中を流れるのは私だけの血ではない。皆に生かされている実感が少しずつついてきた。

「それと…これ…」

彼は懐から何か取り出すと、私の手の上に置いた。

「…これは！」

「親父さんのドッグタグ…欠けて半分しか見つからなかったらしいんだ…」

彼は申し訳なさそうにうつむいて、歯を食いしばった。

「うっん…いいの…きつとお父さんが助けてくれたんだと思うから…」

私はお父さんのドッグタグを強く握り締めた。欠けた部分が手に刺さる。

「それと…わかっているとと思うけど…」

「もうあの機体は使い物にならないんでしょ？」

彼は黙ってうなづく。

「まあ、私の身体自体がそもそも使い物にならないし。」

私は強がって笑ってみせた。内心、悔しさで狂いそうだった。

「とにかく、今は体を治すことに一生懸命になれ。な！」

彼も笑ったが、表情は硬かった。

この後、しばらく二人で他愛のない話をした。お互いに何かを紛らわすように。

安希としばらく他愛のない話をしていると、隊長に会議室に来るよ
うに言われ、俺は直ぐに安希との会話を切り上げ、会議室に向かっ
た。

会議室には艦長と例のメンバー、それと空自の隊員がいた。

「よし、揃ったな。時間がない、早速始める。谷藤三曹、よろしく
頼む。」

谷藤と呼ばれた人は、一礼して立ち上がった。

「航空自衛隊第307飛行隊F-22パイロットの谷藤三等空曹で
す。」

今回集まってもらいましたのは、自分が戦闘中に見たことを取り急
ぎ報告するためです。

前置きはそこそこに、先程の戦闘で我々の戦闘機は二機撃墜されま
した。

その内の一機、F-15が撃墜された時のことです。」

F-15という一言に、俺は思わず身を乗り出してしまった。

「戦闘中、敵機の上昇にあわせてF-15が上昇。格好としては敵
艦に腹、つまりは機体の底部、下の部分を晒す形になった時でした。
敵艦の方角から、F-15の胴体の辺りに青いような、緑のような
光が照射されたんです。」

そしてその光が赤っぽくなった途端に、F-15は煙を吐き、墜落
しました。」

「では、その光が墜落の原因だと言っただな？」

芹沢艦長が念を押すように聞くと、谷藤三曹はうなずいた。

「…もしかしたら…それは空自さん…あんたらの領分じゃないです
か？」

隊長は探るような目線を空自の隊員達に投げ掛けた。空自の隊員達
は、一瞬ばつの悪そうな顔をしてから口を開いた。

「…YAL-1…」

俺の位置ではハッキリと聞こえなかったが、隊長はやっぱりと呟いて、椅子の背もたれに寄りかかった。

「YAL-1とは…まさか…あれのことか!？」

むさしの芳山艦長は驚きに満ちた表情で聞き返した。YAL-1に聞き覚えはあったが、俺の記憶には霞がかかっていた。

「YAL-1とは、正確にはそれを載せる機体の実験機名です。正式名称は弾道ミサイル迎撃機。そして、それに積まれているのが、メガワット級の酸素-沃素レーザー、COILと呼ばれる光学兵器です。」

俺は記憶の霞が晴れてきたのがわかったが、まだわからない素朴にして重大な質問を投げ掛けた。

「あの…そのどこが問題何ですか？」

その質問に皆が呆れたのを感じた。

「その兵器が出す光と、今回の光がそっくりなんだ。COILの発射に伴い、索敵のためにまず炭酸ガスレーザーと複合酸化物YAGを使ったYAGレーザーを発する。これらの色が青いような緑のよくな色をしている。」

そして、例のCOILが、赤っぽい色をしている。

つまり、奴等は光学兵器を有しているということになる。」

もう一人の空自の隊員が丁寧に教えてくれたが、まだ疑問は晴れない。

「いや…ですからその…敵がその兵器を有していると何か不都合が？」

「大有りだ。」

見かねた隊長が口を挟んだ。

「COIL、いやこのタイプの光学兵器としておくか。これを開発しているのはな、アメリカなんだよ。」

俺は目を丸くした。

「じゃあ…俺達は今アメリカと戦って…」

「そんな簡単な話ならまだマシだ。だが、アメリカも甚大な被害を受けていることからその線は薄い。しかし、その他の大国も同様に被害を受けているから、実は開発されていた、もしくは情報を盗み出したという線も0に等しい。」

「それより、それは何回ぐらい使えるんだ？」

芹沢艦長が質問する。

「ジャンボジェットを元にした実験機に積める量で約40回。それが、艦船級のサイズになれば容量は数倍になるかと……」

「あれは確か燃料タンク付近を融解させ、爆発ないし致命傷を与えるものだったな。今回のは少しずれていたが？」

今度は隊長が質問する。

「それはおそらく船故の揺れによる誤差かと。これだけではそれほど問題にはならないかと。」

一つの戦闘が思わぬ波乱を呼び起こし、会議室に不穏な空気が流れ出したとき、艦内に来客が告げられた。

part - 16 感染

会議室のメンバー全員で甲板に向かうと、帝国海軍の連絡員が空自の隊員と談笑して待っていた。

「これはどうも。一体どうなされたんですか？」

隊長は笑顔で挨拶した。

「長官より、先の戦闘の被害等について、説明を受けてくるようにと。」

「そうですね、ではこちらへ。」

説明をするため、会議室へ案内しようと歩き出すと、連絡員は力なく倒れた。

「ちよっ…どうしたんですか!？」

突然のことにブーツとしかけたが、皆に続いて俺も駆け寄った。

よく見れば、彼の額にはもの凄い量の汗が浮かんでいた。

「おい！大丈夫か！？しっかりしろ！」

「くっ…」

何か痛みに堪えるような苦しい声をあげるだけで、呼び掛けには答えられていなかった。

「と…とりあえず医務室運ぶぞ！」

「はい!!」

倒れた連絡員を抱き起こそうとすると、富田二曹が慌ててそれを止めた。

「待つてください!!この時代のこの海域です。どんな感染症に感染しているかわかりません。ここは専門家の医官に任せるべきかと…」

富田二曹はだんだんと声が小さくなっていった。

「そうだったな。すまない、冷静に判断できなかった。おい！艦内放送で医官の高城三佐を呼べ!!」

隊長が叫ぶと、空自の隊員が艦橋につけられた受話器をとった。

しばらくすると、マスクにゴーグル、感染防護衣と完全防備の高城三佐が走ってきた。手にはアルミ製のケースが握られていた。

「大丈夫か！？今から問診をする。答えてくれ。」

連絡員は苦しそうに首を縦に振った。

「頭痛は？」

首を縦に振る。

「関節痛は？」

「…少…し…」

「それより筋肉痛か？」

彼は、また首を縦に振った。

「腹痛や食欲不振は？」

「…少…し…だが…船乗り…には…珍しく…」

「余計な言い訳はいい。それより熱は…」

高城三佐は、いつの間に入れたのか、連絡員の脇から体温計を取り出した。体温計は、そのデジタルの文字盤は39度6分と表示していた。

「なかなかだな…」

「高城三佐…これって…」

富田二曹が心配そうに言うと、高城三佐は笑顔を見せた。

「大丈夫、マラリアじゃあない。ほぼ100%デング熱と見て間違いない。ここでは対症療法しかできないが、致死率は極めて低い。

それに、普通にしていれば人から人へも感染しないから、安心して大丈夫だ。」

強張っていた皆の顔に笑顔が戻った。だが、それとは対照的に高城三佐の顔は曇った。

「どうかしたんですか？」

「ああ、実はな…この船の中にも、デング熱に感染した人がいるんだ。ついさつき急にな。感染者は海空合わせて21名。おそらく最初にコンタクトしたときに蚊がついてきたんだろう…」

「でも、21人ですんで良かったじゃないですか。別に死ぬわけじ

やないし。」

俺は無理に笑ってみせた。しかし、高城三佐の顔は曇ったままだった。

「と、思つかも知れないが、高い熱と激しい筋肉痛が一週間前後続く。戦闘要員としては、とてもじゃないが使い物にならない。」

「わかった。とりあえず感染拡大の防止と、部隊の再編を急ごう！」
「はっ！」

俺達はそれぞれに敬礼をして持ち場に戻った。

相変わらず医務室のベッドの上で、暇を持て余していると、カーテンの向こうで揉める声が聞こえた。

私は暇なのと、持って生まれた立ち聞き根性が眼を覚まし、そつと会話に聞き耳を立てた。

揉めているのは二人。しかもどうやら隊長と、医官の高城三佐のようだ。

やがて、時より二人の口論の中に、私の名前が出てくることに気付いた。

こういう時、古いドラマなら”私のためにケンカをするのは止めて！！”と言って飛び出して行くのだろうが、やめておく。

自分で言っというのだが、そんな姿を思い浮かべると虫酸が走る。それよりそんなアクションを起こしたら間違いなく傷口が開く。

そうこうしているうちに、二人が揉めたままこちらに近づき、カーテンを開けた。

「近藤、腹の具合はどうだ？」

隊長は笑顔で尋ねてきた。その隣の高城三佐は険しい顔を崩さない。

「ええ…まあ…まだ1日しか経ってないので何とも言えないこともありますけど…」

私は全力で空気を読んで、全力で曖昧な答えを返した。

「そうか…ところで、だな。昨日、テング熱が流行ったの知ってるだろ？」

「ええ…まあ…何だったら向かいのベッドで寝てますしねえ…」

私はそう言っって、向かいのベッドで苦しそうに寝ている、海自の隊員ことを指差した。

「それで…その…我々空自の中からも感染者が一人出てしまった。

しかもよりによってパイロットが感染した。後一週間弱は諸症状が続いて、動くことがままならないらしい。

それに、不幸は重なるものでな…そいつ…蒼龍のパイロットだったんだ…」

隊長の申し訳なさそうな顔と、高城三佐の厳しい表情で、私は話がだんだんと読めてきた。

「もしかして…私に代打をやれと？」

「ああ…もちろん、無理はわかっている。だが頼む相手がいないんだ…」

「彼は…もう一人撃ち落とされたって…彼ではダメなんですか？」

「…彼は…」

珍しく隊長が言葉を詰まらせる。見かねた高城三佐が衝撃の続きを話した。

「彼ならな、もうパイロットとして…いや自衛官として使い物にならない。」

「えっ!?!…一体…どういうことですか？」

「まあ…君が奇跡づくめの生還だったって話さ。彼は至って普通の生還をした。敵の攻撃に会い、爆発ギリギリのところでベイルアウトし、爆発に巻き込まれ…その…大事な右手を失った。」

「…」

私は思わず言葉を失ってしまった。

「…今、これ以上に編隊を引つ掻き回す訳にはいかない。いや、それ以前に他の奴ではあの戦闘機をおそらく操れない。」

「それで…私に？」

隊長は黙って頷いてから続けた。

「お前が…父親の…近藤三佐のことがあって…F-15にこたわっているのはわかる。だが…」

隊長の言葉を高城三佐が遮る。

「君達がなんと言おうと私は…」

さらにその高城三佐の声を私が遮った。

「私…翔びます!」

「近藤…」

「私は絶対に許さん！！その傷じゃあちよつとでもGがかかった瞬間に！腹のきずが裂けて死ぬぞ！！」

「だとしても…やらなければいけないんです。」

私は決意は固かった。それを悟った高城三佐は黙って出ていった。

「すまない…」

「…大丈夫です…きっと大丈夫…」

私は半ば自分に言い聞かせるように、何度も繰り返した。

part - 17 召集（後書き）

御意見・御感想お待ちしております

街のクマさん、DISASTER（災害の裏の真実）、活動報告内
の街のクマさん公式外伝もよろしくお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111h/>

漂流自衛隊

2010年11月3日02時02分発行